
One that ruins The country

美緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One that ruins The country

【Nコード】

N4984L

【作者名】

美緒

【あらすじ】

独裁的な政治を図る侵略者地球人に、意義を唱えた者たちが立ち上がる。だが、あと一步のところまで敗れてしまう。

その意志を受け継いだ者たちが、あらゆる想いを胸に抱えながら立ち上がる。

大きな闇がうごめくなか、意志を受け継いだ者たちが苦悩の末導き出す真実と道は何か？

それぞれに抱える心の闇を共に振り払いながら成長していくSFファンタジー。

この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などはいっさい関係ありません。

プロローグ

ある日のこと、いつものように都市部に誇る最大の室内プール
メアスに行っていた時のことだった。

その大型プールは一面マジックミラーのガラスに覆われた造りにな
おあり、外からは見えないが中からは外の風景が一望できる。

そこには幾つもの種類のプールがあり、流水プールや子供用の浅
いものや逆に水深の深いもの、競技用の短水路、長水路、飛び込み
滑り台など、競技の練習から遊ぶものまでさまざまな設備がされて
いる。

またメアスには、他の室内プールとは違い至る所に水着のまま入
れるフードコートや店が存在するあたりは珍しいところともいえる。
泳ぐのに疲れたらそのまま飲み食いでき、飽きたらシヨッピングも
可能なのだ。

その店の一つで、彼女が愛用しているカフェテリアで休憩してい
た時だった。大型プールの周辺には大きなビルは建設されておらず、
人が行き交う公園のようになってる。

5階からの風景はとても見晴らしも良い。いつものように何気な
く外の風景を眺めると目に入ったのは、彼女の唯一の肉親であり、
育ての親である叔父の姿と怪しげな黒いスーツを身にまとった二人
と話している場面だった。

彼の職種を考えると特に大した構図ではなかった。

FBIである叔父が怪しげな人物を見かけて職務質問しているだけだと考えることもできる。

そう考えるのが普通だろう。

それなのに、彼女は何か引っかけりを感じた。

何かがおかしいのだ。

そのなにかが彼女には分からず、知らず知らずに眉間に皺を寄せ、肝心の叔父の表情は後ろ姿で見えず、正面にいる怪しげなスーツの二人は黒のサングラスをしているのでよくわからなかった。

ただ分かるのは彼らが無表情だということ。

ああ、そうか……。

冷静に見ている彼女はようやく気がついた。

FBIである叔父が相手であるのにもかかわらず彼らは避けることもなく、媚びることもなく、怯えるそぶりもなく、そして、逆上することもない。ごく一般の人間がするような雰囲気と表情ではなかった。

ただ冷静にどちらが優位の立場なのか思わせる雰囲気があった。優位なのは、叔父ではなく怪しげな黒いスーツの二人組のほうだった。

そう気づくと同時に彼女の体に戦慄が走った。

彼らの間に何があったのだろう。

これから続くと思っていた平穏な日々が失われてしまう不吉な予
感を感じた。

プロローグ（後書き）

つたない文章で申し訳ありませんが、お付き合いいただけたらと思います。

第一章 始まりと別れ

それから月日がたった時のこと、彼女はいつものように大型プール　メアスに来ていた。

この日は天候に恵まれ、室内に高く上がった太陽の光がガラスの天井から降り注いでいた。

その光が降り注ぐ中、人々が元気よく音を立てて泳ぎ、ジャンピング台から飛び降りるのもいれば、カップルでイチヤツについている人もいる。

人々が和やかな雰囲気であるところに、不似合いの人が入ってきた。

黒のスーツに黒のサングラス。

全身黒を包み込む中、くすむことを知らない金髪はこの男に似合うだろうと思われる中間くらいの濃さで、黒のサングラスで分かりにくい綺麗な造形の顔立ちの異彩を放つ男だった。

ここにいるだれ誰もが不審人物だと思ったのだろう。

周りにいる人が怪しい人を見る目つきと、限られた範囲でしか分からないはずの男の美しさに目を奪われる者のふた種類の視線が彼の動向を観察していた。

その男は浴びるほどの視線に気が付いていないのか、先ほどからせわしなく辺りを見渡し何かを探しているようだった。普通、気付いていればこの場の雰囲気にしたたまれなくなつて、小さく縮こまりながら遠目から探そうなどと考えるだろうが、彼にはそんな様子は微塵も感じられなかった。

そんな男の視線がある一点でとまった。どうやらお望みの物が見つかったらしい。

ドボンッ

と、一つの音と共に周囲に水滴が飛び、男が叫んだ。

「うわっつめて〜」

言いながら全身転々と水滴が飛んだところを内ポケットから取り出したハンカチで拭きとり、濡れてしまい周囲が見えにくくなったサングラスも外して水滴をふき取る。

サングラスを外して見えたのは、海を想わせる濃い青の瞳だった。よくよく見れば男は美男子だったことに気づく。

少し長めですらっと伸びた手足に、サングラスを外したことによって一望できるのは若く見える整った顔立ち。しかし、男の纏う雰囲気からすると顔立ちよりも年齢は上だと感じる。

その幼さも男の美貌を引き立てていた。

先ほどから注目していた人たちは、サングラスを外した男の姿を見ると二つの反応を示した。不審者だと思っていた人たちは驚愕に打たれ、本能で彼を美しいと思っていた人たちは思っていた以上に綺麗な顔立ちを見て見とれる。

そんな周囲の反応をもともせず、男は先ほどジャンピング台から飛び降りてきた人物がプールから上がってくるのを黙って見ていた。その瞳は非難の色に染まっていた。

声を失う周囲の人たちと非難の視線を向ける男が待っている中、プールの中から一人の少女が出てきた。

ゴーグルとキャップをしているためよくは分からないが、目の前にいる男と同じように整った顔立ちをしている。その少女の全身はフリーバックベージュの水着に包まれており、素晴らしいプロポーションだというのが見てわかる。

少女のような雰囲気と女性のような体つきをした彼女は神秘的なものに見えた。

周囲が見守る中、男は少女に不満を露わにさせて話しかけた。

「シエナ、冷たいじゃないか」

非難された少女は不敵に笑い、ゴーグルとキャップを外しながら言った。

「ごめんなさい。でも、そんな恰好で来る方が悪いんじゃないかしら？」

キャップを外したことで隠れていたブロンドの髪はしなやかに少女の背に落ちる。少女の腰にまで届く長い髪と、男とは違う青色に灰色がかかった瞳はいたずらが成功した子供のように輝いている。

悪気なく言い放ちながら笑う少女の姿はまぎれもなく女だった。

実際に場違いな格好で来た自覚もあり、こうなった少女を言いくるめるのは時間の無駄だということを知っている男は小さく息を吐いて手に持っているサングラスとハンカチを上着のポケットに仕舞った。

「用事が出来て来たんだ。仕方ないだろ……」

男の言葉を聞いた少女の瞳が一瞬にして不安感じて輝きが消える。ずいぶん前から感じていた不安が少女の身に襲いかかった。それを危険な仕事に就いていることによる自分を氣遣ったことだと感じた男は安心させるように微笑んだ。

その微笑みにほんの少しの不安が払拭され、少女は着替えるために更衣室へと歩き出した。

普段用事があっても遠巻きに見て入ってこようとしない叔父が来たのには、ここで話せない何かがあると感じてのことだった。

少女は前を歩いていたら気づかなかった。

少女の姿を焼き付けんばかりに見つける叔父視線に。

もし、その視線に気づいていたらこの先が変わったかというとおそらく変わりはないだろうと言い切れる。

今から起こりうる未来を変えることが出来たとしたら、それは聞き出す勇気があればよかったのかもしれない。

だが、二人は知らない。

ずっと二人を見ていた周囲の人たちがいたことを。

二人の姿が見えなくなってようやく、忘れられていた音を取り戻した。

第一章 始まりと別れ（後書き）

改行をどのくらいするといいのか分からず、見難かったら申し訳ありません。

駄文ではありますが、よろしければお付き合いくださいます。ここまで読んでくださってありがとうございますとございます。

始まりと別れ2

それから、シエナは体にタオルを巻き、サンダルを履いて叔父のカーマと一緒にエレベーターへと向かっていった。

実はこのプール、控え室が一、二階には少しのスペースしかなく、朝早く来た人が運のいい人にしかありつけない。

その他の人は、最上階にある控え室を使う。

その不便さから一回来ても来なくなる人もしばしばだが、プールの横にあるちよつとしたカフェテリアやカフェバー、レストランなどといった水着のままでも入れる店がある利便性もあるため常連客も多い。

それよりも、町のほぼ中心にあるからと行ってもいい。

それ故、至る所にエレベーターやエスカレーターが設備してある。二人がエレベーター前まで行くと、タイミング良く三つあるエレベーターがずれることなく一度に開いた。

この時カーマは、何となく違和感を感じた。

ついた瞬間に開いたその扉が踏み出してはいけない入口のように感じたのだった。

何者かに操られ自分たちの平穏な日々を失う様な嫌な予感を感じさせる。

しかし、たまにはこんな事も時にはあるだろうと思い、嫌な予感を払拭させる。

だがしかし、この時気にすべき事だったと後悔するのだが……。

カーマは、一つのエレベーターに入ろうとして、途中で足を止めた。

エレベーターの中に居た人が多く、水着姿のシエナには悪いだろうと思ったからだ。

予期せぬ出来事にシエナは反応するところが出来ず、カーマの背中に思いつきり顔をぶつけたのだった。

「いたつ、何なの？」

転びはしなかったものの、思いつきりぶつけた顔に痛みがじんじんと波を打つ。

「ごめん、いっぱいだから…隣のに乗ろう」

「分かった」

そういうことならと、納得いったように頷いて二人は真ん中のエレベーターに乗り込んだ。

先ほどのエレベーターとは違ってそこには一人の青年しか入っていないかった。

青年はもうだれ誰も来ないと見て扉を閉めた。

そのまま軽やかに上に動き出すかと思いきや、ガコンツという音がしてエレベーターの動きが停止した。

異常な様子はなかったのになぜいきなり動かなくなったのか訝しげな表情で思わず互いにシエナとカーマは顔を見合わせた。

しかたがなく、カーマ様子を見ようと動いた瞬間のことだった。

両サイドのエレベーターから銃声とけたたましい悲鳴の音がした。その音と声が止まるとともに、二つの足音が彼女らのいるエレベーターへと近づいてくるのが厚い扉の向こうから聞こえてくる。

次は自分たちの番なのだろうか、徐々に近づいてくる足音に恐怖が募る。

恐怖に屈したシエナは、無意識のうちに叔父の腕をつかんで力強く握りしめた。

これから起こるだろう予感に身構えようとしたのだろう。

いきなり銃を突きつけられるのも恐ろしいが、その前に両サイドから耳に残る数多い悲鳴の声を聞いていればなおさらである。

しかし、シエナの心配をよそにカーマはシエナの手を放す。

そして、優しく手を添え…次になだめるかのようにシエナの頭をなでると己のスーツの下に隠れている銃を抜いた。

その顔は大切なモノを守りたい叔父の顔ではなく警察官の顔でもあった。

しかし、そんなカーマの心中にさきほどのシエナのことが気がかりだった。

その様子が顔に出ていたのだろう。

困っているのを見かねてか、先ほど先に乗車していた青年が声をかけてきた。

「あの……、よければ俺でよければ……………」

おずおずとかけてくる声に任せていいかと心配になったが、青年の顔を見て決意した。

この男なら大丈夫だと思い、無言で頷くことで肯定を表した。

それを確認した青年はシエナを己の背に庇うようにして、操作パネルの前に待機した。

こちらの準備を待っていたかのように、ガガガという無理やり戸を開ける音と共に血まみれの二人の姿が目の前に現れた。

その男たちは、普通の人間とは思えないくらいにピリピリと殺気立っていた。

その殺気に呆然としてみると、ようやく一人の男が口を開いた。

「シエナ・ニーナ。我々と一緒に来てもらおう」

まったく知りもしない残虐な男から自分の名が出てきてシエナは愕然とした。

しかし、混乱しているはずの頭の中で疑問が生まれ、彼らに問いかけたくなった。

なぜ？

と…。

それを遮るかのように、シエナの前にカーマは立ちはだかる。

「それはできない相談ごとだな」

その言葉を合図にして青年は閉まるボタンを押す。

それを見たシエナは自分たちを守り犠牲になろうとしている叔父

のところに駆け寄ろうとした。

「カーマ！」

しかし、青年がシエナの手を寸前のところでつかみ取ることに
りカーマ一人を残してエレベーターは上へと上昇していった。

しばらくの間、気まずい沈黙がエレベーターの中を支配した。

始まりと別れ2（後書き）

更新遅くなって申し訳ありません。

亀のように鈍足更新で申し訳ございません。

気を長くしてお付き合い頂けたらなと思います。

始まりと別れ

「……どうして、放してくれなかったの？」

しばらくしてようやくシエナが口を開いた。

その表情と声音は、泣きたいのか怒っているのか分からなかった。青年は一瞬うるたえたようだったが、はっきりとした口調で答えた。

「どう……して……」

君は分かっているだろう。

彼は何としても君だけは守りたかった。

でも、あの状況で守りながらは難しい。

下手したら二人して殺されに行くようなものだ。

だから近くにいた俺が手を貸した。

さっきの男の人も最初は気付かなかったみたいだけど、こう見えても俺はFBI捜査官なんだよ」

「え？」

てつきり十八歳前後だと思っていたシエナは間違いだったかと俯いていた顔を上げ、相手の顔を見た。

だが目に入ってきたのは、黒色の髪を真ん中で分けている少し丸顔の整った顔立ちに緑色の妙に光を帯びたひとみ瞳だった。

まるで少年のようにキラキラと光りを帯びている瞳が彼を幼く見せていたようだ。

(何なの……？この人の目……)

彼も同じようにシエナの美貌が目に入るとともに、一瞬意識が遠

くに行つた。

彼にはシエナの美貌は強すぎたらしい。

しかし、何とか理性を取り戻し少し冗談ばくいった。

「カーマ捜査官に頼まれたからには、あなたをお守りいたします」
まるで昔の紳士のようにレイをしながら言う青年の発言にシエナはびっくりしたが、すぐに微笑した。いまの彼女にはその言葉が何より嬉しかった。

カーマは行つてしまった。

二人を守るために……いや、自分のせいで。

こんな状況で一人にはなりたくなかった。

己の存在のせいで誰かが犠牲になるなど、自分自身を追い詰めたくなる。

「ありがとう。」

あなたの名前を覚えてくれない？

私はシエナ。シエナ・ニーナ」

「俺はシエル・ネグア。」

君は……シエナは何で狙われているんだい？」

シエナは分からないと首を横に振った。

「でも、……何で私の名前を知っていたんだらう？」

（あの人たちは、あの時の人だらうか……でも、なぜ自分を？）

シエナは、あの時見た男たちと似ていることに気づいていたが、シエルには言わなかった。

彼をすべてにおいて信用しているわけでもないし、なりよりこれ以上自分に関わつて巻き込まれてほしくなかった。

以前あの男たちを目撃した時に感じた不吉な予感は当たっていたのだから。

「さあ、ああゆうやみ闇の奴はいろいろなところから情報を得るからな。」

まあ、取りあえずここから出て警察かFBIの所のどつちかに行こう」

シエナが隠し事をしていないことに気付きもしないで、呑気にこれからの事を話しながら無意識に懐からタバコを取り出して何気なく吸い始めた。

シエナはその光景をじつと見ていた。

別に許可なく吸い始めた事に対して咎めたいとかそういう訳ではない。

思わず煙草を吸う人物が脳裏に浮かんでしまったからだ。

その視線に気付いたのかシエルは問う。

「どうかした？」

「え？ あ……タバコ……」

自分の手元に目をやると火のついたばかりのタバコがあると今さらながら気がついた。

急いで携帯灰皿を取り出してもみ消そうとした。

「ごめん。嫌いだった？」

慌てて気遣うシエルを見て、シエナもそんなつもりはなかったと慌てて止めた。

「ちっ、ちがうのっ……ただ……ただ、叔父さんも吸っていたから……男の人はそういうの、好きなのかなって……」

今どうしているんだろうと、ふいに不安に駆られる。

シエルは落ち込んだシエナを落ち着かせるように優しい声音でシエナの不安から出た問いに答える。

「人にもよるんじゃないのかな。」

神経を落ち着かせたいときとかに吸ったりするみたいだよ」

自分も吸っているのにも関わらず他人事みたいに言った。

「そっか」

自分の不安を感じて優しくなったシエルに感謝の意をこめて微笑みかけた。

それと同時に、エレベーターが付いたというようにチンっという甲高い音を鳴らして扉を開いていった。

シエナを一度見かけたことのあるFBI捜査官に託して上へ昇っていくエレベーターを傍らに、カーマは彼らは睨み合っていた。

しばらくすると相手側が痺れを切らしたのか持っていた銃を懐へとしまった。

応戦する気はないらしい。しかし気を抜けないカーマは銃を下したが懐には仕舞わなかった。

こういった奴らに甘い顔を見せれば、己の身の破滅を招くことになる。

「そう警戒しなくていい。

あなたを殺す気はない」

一人がゆつくりと落ち着いた口調で言った。

以前メアスの前で出会ったあの男だ。

「なぜこんなことをした？」

「ふっ… FBI捜査官のわりに頭が悪いですね。

あなたが我々の要求に従わなかったから」

「シエナのことか？」

「ええ、少しは頭がいいらしい。

ですが、軽率でしたね。

なぜ、今日我々との約束を破ったのですか？」

ピクッとカーマのまゆ眉が動いた。

気付いても彼らは気にもとめなかった。

「何も言わずに行けと？」

それに気がついた二人はうすら笑いを浮かべたまま、常人の早さとはいえぬ早さで彼の前後を囲い込み羽交い絞めにした。

「抵抗はやめた方がいいと、先ほどいいましたよね。」

それに、行くことについては同意していましたよね。

してもいいですが、抵抗するだけ痛みも伴いますよ」

「くっ」

案に動けない身体になると言われ、仕方なくカーマは一気に肩の力を落とした。

これからの事を考え、今はいうとおりにするしかなかった。

「あっあきら諦めてくれましたか？

それは良かった」

腹に一物だけでなく、それ以上の物を持っていそうな笑いを浮かべた男ともう一人の男に囲われてカーマはメアスを後にした。

始まりと別れ③（後書き）

ものすごく更新遅くなり申し訳ありません。

「想い」の方を中心に更新したいと思っていますので、こちらは
おろそかになってしまつことも多いかとは思いますが、ご了承願いま
す。

始まりと別れ4（前書き）

残酷な表現が含まれます。

苦手な方、現実と区別が出来ない方はご遠慮願います。

始まりと別れ 4

シエナとシエルはエレベーターの音が鳴るとエレベーターの死角になるパネル部分に身を顰めた。

シエルは携帯していた銃を片手に構えて慎重に外を伺う。

外にさつきいた彼らの連中はおろか辺りに人がいなく閑散としている様子に肩透かしを食らったような気分になった。安全を確認した彼はシエナに合図をして外に出た。

すると示し合わせたように、一步出たところで女の叫び声が木霊した。

数分前の事を思い出し、身を構えたが黒いスーツを着た男たちは現れず、顔を恐怖で歪めている腰を抜かした女性が居るだけだった。

シエルは拳銃を下し、シエナと顔を見合わせると即座に二人は駆けつけた。

女性が見ている物を目にした瞬間、二人は凍り付いた。

二人の乗っていないなかった左右のエレベーターを見たら誰もがそうなるだろう。

そこには、血に塗れた壁と床：そこに 無惨にも転がる幾つもの死体：かつて人間だったものが、銃弾によって見るも無残な亡きがらへと変わってしまったからだ。

それはまさしく無差別、男女老若関係無しに殺されていた。

女の人が叫んだため、野次馬が増えてきた。

しかし、駆け寄ってきたすべての人が声を失ってその光景を茫然と眺め、動くことを忘れたブリキのおもちゃのように佇んでいることしかできなかった。

ハッと意識を取り戻したシエナは、隣にたたずむシエルを見て放

心状態になっっているのを見ると、自分も同じ状態だったことを再度認識した。

たとえば、シエルのようにFBIという職業柄でもこのような出来事が頻繁にあるわけではない。

シエナはなるだけ脅かさないように心がけシエルの名前を呼んだ。

「……シエル？」

シエナの呼びかけに、彼はびくついた。

呼んだのがシエナだと気付くと、安堵したように胸をなでおろした。

「なに？」

「私……着替えてくるね」

「わかった。」

気をつけて」

待っていてくれると分かったシエナは危なっかしい足取りで控え室に向かっていった。

シエルは、シエナの後ろ姿を見送って懐から携帯を取り出した。

FBIと警察に電話をして応援を呼び、現場の方へ近寄って指示を出した。

「FBIのものだ。」

下がってくれ」

バッジを見せながら、残客な光景を見て硬直している野次馬たちを一定の距離から遠ざかるように言う。

この言葉で意識をシャットアウトしていた多くの人たちが先ほどのシエナのようにフラフラとその場を後にした。

若干気分を悪くしてその場に立ち尽くす人や腰を抜かして動けない者がいるようだ。

そんな人たちもどうにかしなければならぬと思いつながらこれからするべきことを念頭に置きながら次の事に移る。

「それと……この中にこの経営者の人はいないか？」

そういうと、野次馬の中から混乱しているような声が出た。

「わっ……私がそうです」

「悪いがこっちに来てくれ」

減っては増え減っては増えという悪循環の野次馬をかき分けてシエルの方へと歩み寄って来た。

「なっ……なんででしょうか……？」

「この経営者だと分かる綺麗な出で立ちの五十代くらいの男性は、おそらく普段からは想像できないような青白い顔をし、少しおび怪えるように経営者の人と名乗る者はシエルの元へ来た。

「ちよつと聞きたいことと、頼みたいことがあるがいいか？」

「はい。」

「なんででしょうか？」

「まぜこんな残酷なことが自分の経営している施設で起こってしまったのだらうかという疑問と恐怖が渦巻いているだらうことが見て取れた。」

「そして、出来ることならもう二度と関わりたくないと思っているだらうと推察できる。」

「本来ならばこのような事件はアミューズメントパークともいえるプールを売りにしているメアスで起こるはずのない事件ともいえる。」

「まず、エレベーターは三つ同時に動いているのか？」

「いえ、そんな事はないと思いますが……ごく稀に偶然で動く場合もござります。」

「全く同時にというのはなかなかないかとおもいます……それがどうかしましたか？」

「ちよつとね……」

「そういつてシエルは苦笑いをしてごまかした。」

「エレベーターを一階で止めることはできるか？」

「一階でございますか？」

「そうだ。」

「一階で殺されたからな……」

聞いていた営業者の人は変な顔をしたが深く追求してくることはなかった。

「それもそうだろう。」

まさか彼がエレベーターの中の一つに入っていたなんて思いもしないのだから……。

話が終わり経営者の人がエレベーターを一階に下すよう指示を出しに行ったすぐに、示し合わせたかのようにFBIの応援が来た。

始まりと別れ4（後書き）

遅くなりました><

始まりと別れ5

「おーい、シエル」

その呼びかけに、シエルは声のする方へと向いた。

ようやく来た応援ということと見知っている同僚の人物だということに気付いていつの間にか力の入っていた肩の力が抜けたように感じた。

「お、ルック早く来い。」

それと無線で他の奴らに一階で待機しているといっけてくれ」

走ってくる同僚ルック・ケナーに頼んだ。

ようやくたどり着いたシエルの隣で、若干息切れをしながら不思議そうにルックに問う。

「何で、一階なんだ？」

「事件があったのが、そこだからだ」

「何でお前がそんなことを知ってる？」

「俺たちがそのエレベーターの真ん中にいたんだ」

「!？」

…なら何で無傷なんだ？

そこにいたのなら、お前だって巻き込まれただろ？」

「それはそうだが、カーマさんもいたんだ。それで助かったんだよ」

「!？」

それを聞いた同僚のルックは驚きの表情を浮かべて声を失った。

「あっ……あの、カーマさんに……?」

同僚の顔を見れば信じられないという声に出なかった言葉が浮かんでいた。

「ああっ……今さら思うが、よく助かったなと思うよ。」

これもあの人のおかげだ」

そういって、シエルは苦い物を漬したような表情でエレベーター

の方を見るという動作をした。

それを見たルックは言われるがまま彼の指している方を見た。

何気なく ルックはエレベーターの方を見たとたん声を失った。

まあ、それは無理もないと思うが…。

「 シエル、お待たせ」

小さな荷物を持つシエナが戻ってきた。

「 おお、よくここが分かったな」

「 うん、叔父さんも事件があつたら現場で指示出してたから、こういうのは慣れてるし……この人は誰？」

「 ああ、同僚のルック・ケナーだ」

「 よろしく」

シエナとルックは互いに顔を見て挨拶をしあつた。

「 それじゃ、一階に行くか」

「 あれ……？ ここじゃなくて？」

「 事件が起こつたのは、ここじゃないだろ？」

「 そっか……」

「 それじゃあ、お願いします」

シエルがルックの隣にいた営業者の人に頼んだ。

それに対して、ルックは人がいたことに今気づいたのか、驚いた顔をしていた。

経営者の人もなるべく光景を見ないように違う方を見ていたのだらう。

とつさに声をかけられて取り乱していた。

「 全部でよろしいですか？」

「 ええ」

「 では……」

おそらく管理システムで動かすのだらう。

手に持っていた無線で連絡を取っていた。

経営者含めシエナたち四人は、真ん中のエレベーターへ乗り込んで下へと下って行った。

エレベーターの中に入り、今さらながらルックは一つ疑問に思った。

「ところであなたは？」

自分の名前は言ったのに聞くのを忘れていた。

先ほど同僚が複数形で話しているのを見て、事件に参与している人物に見受けれるが本当にそうなのか分からなかった。

「あつ、私はシエナ・ニーナです」

「シエナ？」

「はい」

「君もこのエレベーターに乗っていたのかい？」

「ええ……」

「……………」

質問に答えたシエナは落ち込んだ様子を見せ、ルックは彼女の名前にどこか引つかりを覚えた。

「どうかしたのか？」

いきなり黙り込んだルックを見てシエルが声をかけた。

「んー、どっかで聞いたことがあったような気がする……………」

「それはそうだろ……………」

カーマさんと同じ名字だからな。

それに、たまに出入りしているところも見たことあるから、聞いたことがあるんじゃないのか？」

「えっ！ そうなの？」

ルックは驚きに声を荒げ、すぐさまシエナを見た。

「ええ」

「なんだあ、そういうことか…おれてつきり違うことかと思っっちゃって……………」

はははっと笑いながら、ルックは頭をかいた。

二人は、違うことってなんなんだよっと思っていたが、聞くことは出来なかった。

少しするとようやくエレベーターが一階へと着き外へ出ることが

出来た。

すでにそこは他のFBIの人達が現場だったところ周辺をテープで囲い外部の人たちが立ち入ることが出来ないようにされていた。シエナとシエルは、目撃者として現場だと思わしき周辺があつているか念のために確認をした。

確認をするといつても、自分たちの見えていたところが少ないのであまり意味はなかったが、やらないよりはましだろう……。

シエルは、シエナが落ち着いていないことに気が付いた。ずつとあたりを見回して何かを探している。

まるで、母親と別れてしまった小さな子とものようだ。

それでも彼女は泣くそぶりを見せず、ただいなくなってしまった人物を静かに探し続けている。

その光景がとても切なく感じた。

「シエナ？」

シエナは、声をかけられた方へと素早く方向転回した。

しかし、望み通りのものとは違って、彼女は肩をガクンと落として、弱々しい声でいった。

「カーマ……」

「……」

「ごめんね」

切なそうな表情をされていわれ、見ている方が悲しくなりそうな今にも泣いてしまいそうな表情だった。

「せつかく声をかけてくれたのに……すぐ、胸騒ぎがするの……もう、いままでと同じ生活に戻れないような気がして……どうしてああの時、引き留めておくべきだったって……思っちゃ……って……ごめんなさい……こんなこという、つもりじゃあ……」

シエナは、シエルの行動に目を見開いた。

シエルは、彼女が泣きそうになるのを堪えていつているのを見て、

とつさに彼女を引きよせていた。支えてあげなくてはいけないと思つたその思いが、彼を動かしていた。

過去の自分に似た彼女をほかつておけなかつた
シエナの耳の元でシエルの声が響いく。

「大丈夫。」

カーマさんがいない間、俺がいる……俺を叔父さんだと思つてもいいよ。

ものすごく頼りないけど……それとね、泣きたいときは泣いていいんだ
「

温かい温もりと、必要以上に優しい声音がシエナのすでに緩みがちだつた涙腺を開いた。

彼に身を任せて、シエナは静かにシエルの腕の中で泣いた。

泣いている最中、ふとシエナの頭の中にあるビジョンが頭の中に浮かんだ。

いつだつたか忘れ去られた遠い記憶の光景だつた。

（あれは……カーマ？

いつ？

……そうか……こうして人の中で泣くのは、両親が死んでしまつたとき以来……。

カーマの腕の中で……）

しばらくしてようやくシエナは涙が引いた。

その間ずっとシエルは、何もいわずに抱きしめていてくれた。

そして、泣き終わった後も深く追求せずに付き添っていてくれる彼に感謝の念を抱かずにはいられなかつた。

その後、シエルと共にシエルの家へと向かつた。

その自宅はメアスから車で五分と掛からないところにあつた。

鍵で家を開けて綺麗に整頓されている室内にシエナはびっくりした。

ただ物が少なく閑散としていて淋しい印象を感じた。

シエルが軽く夕食を作って二人でゆっくり食べ終えると、シエルのベッドをシエナが使い就寝することとなった。

寝ようと思っても今日会った出来ことが頭に浮かんで眠れないと思っていたシエナだったが、いつの間にか意識を手放していた。

始まりと別れ5（後書き）

実は昨日ここまで投稿する予定が出来ませんでした・・・^^；

ちなみに、シエルのシエナを気遣う様子は恋というより過去の自分
を見ているようでほっておけないのと彼自身の優しさがあるからだ
と思います（ちゃんとわかっているようで分かっています……ダ
メでしょ……思わず自分で突っ込み）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4984/>

One that ruins The country

2011年2月1日21時40分発行